

Title	J.S.ミルにおける異質な快樂の優劣に関する一考察
Sub Title	J.S. Mill's higher pleasure
Author	水野, 俊誠(Mizuno, Toshinari)
Publisher	慶應義塾大学倫理学研究会
Publication year	2008
Jtitle	エテイカ (Ethica). No.1 (2008. ) ,p.85- 101
JaLC DOI	
Abstract	J.S. Mill's conception concerning the quality of pleasure includes two claims: (1) there is a quality difference between pleasures as pleasures. (2) Some of these are superior to others on grounds of quality. I have already considered how to understand the first claim in another paper. So in this paper I will consider how to understand the second claim, that is how to understand Mill's notion of higher pleasure. I will criticize an interpretation of Mill's notion of higher pleasure that Mill's higher pleasures are the pleasures caused by the exercise of higher faculties such as intellect, emotion, imagination, and moral sentiment. Then I argue for a more appropriate interpretation: Mill's higher pleasures are best understood as pleasures taken in the development of individuality or maybe in flourishing in what one makes of oneself.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20080930-0085">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20080930-0085</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# J.S.ミルにおける異質な快樂の優劣に関する一 考察

水野俊誠

## はじめに

快樂の質に関するミル (John Stuart Mill) の考え方は、快樂には質的な相違があるという主張、およびある快樂が他の快樂より質の点で優れているという主張を含む。第1の主張をどのように理解すべきかについては別の機会<sup>1</sup>に論じたので、本稿では、第2の主張をどのように理解すべきかを考察する。以下、まず快樂の質に関するミルの考え方の概要を述べ、つぎに、第2の主張をどのように理解すべきか、すなわちミルのいう高級快樂とは何かを考察する。

考察にあたっては、ミルのいう高級快樂とは知性、情動 (emotion)、想像力、道徳感情などの高次能力の行使がもたらす快樂であるという解釈 (高次能力説)、およびミルのいう高級快樂とは個性の発達あるいはその人らしさの開花がもたらす快樂であるという解釈 (個性発達説) を軸に検討する。

## (I) ミルの議論

ベンタム (Jeremy Bentham) は、快樂と苦痛の価値は量的に測定できるといういわゆる量的快樂主義の立場をとっている。ベンタムの考え方によ

れば、快楽と苦痛は、7つの要因すなわち強度、持続、確実性、遠近性、多産性、純粋性、範囲によって評価されるが、とくに重要なのは強度と持続である<sup>2</sup>。そこでベンタムの考え方を大筋でとらえれば、ある時点における快楽や苦痛の強度とそれらの持続時間が当該の快楽や苦痛の量を構成し、その量に基づいて快楽や苦痛の内在的価値が確定するということになる。

ベンタムのこのような考え方をとれば、「生活が快楽より高い目的—快楽より立派で高尚な欲求と追求の対象—を持たないと想定することは、まったく卑しい下等なものであって豚にしかふさわしくない学説である」(U 2.3) という、カーライル (Thomas Carlyle) らが功利主義に対して差し向けた批判に答えることが困難になる。また、ベンタムの考え方をとれば、プッシュピン遊びの快楽と詩の快楽が同じ尺度で比較可能であるとか<sup>3</sup>、子供を亡くした苦痛と虫歯の苦痛が同じ尺度で比較可能であるという奇妙な結果に行き着くことにもなる<sup>4</sup>。

量的快楽主義のこれらの問題点を回避するために、ミルは快楽には質あるいは種類の相違があり、それらの相違に基づいて価値の優劣が生じるという、いわゆる質的快楽主義の立場を採用した。まずミルは、快楽には量の相違のみならず質の相違もあると以下のように述べている。

ある種類の快楽が他の種類の快楽より望ましく価値があるという事実を認識することは、功利原理とまったく両立可能である。他のすべてのものを評価するさいに、量のみならず質も考慮されるのに対して、快楽の評価が量のみに基づくと考えられるべきであるということは、ばかげているだろう。(U 2.4)

これまでに説明したような最大幸福原理に従えば、究極目的は、できるだけ苦痛を逃れ、量と質との両方の享受においてできるだけ豊かな生存ということであり、(我々が自分の利益を考えようと他の人々の

利益を考えようと) 他のすべての物事が望ましいのは、この究極目的への関連において、かつそれのためになのである。(U 2.10: 下線は引用者)。

快樂には量の相違のみならず質の相違もあるという考え方を述べた後、ミルは快樂の質とは何かを詳しく説明せずに、快樂の質的優劣の判定手続きについて以下のように述べている。

もし、快樂における質の相違という言葉で私が何を意味するか、または、一つの快樂を、量において大きいということによらずに、単に快樂として、他の快樂より価値があるとするのは何によってであるか、ときかかれたならば、可能な答は一つしかない。二つの快樂のうち、両方を経験したすべての人あるいはほとんどすべての人が、それらを選択すべきだという道徳的義務感とは無関係に、一方をはっきり選ぶことがあれば、その方が他方より望ましい快樂である。もし十分に両方を熟知している人々が、二つのうち一つを他方よりもはるかに上位におき、その程度が、それには他方よりも多くの不満を伴うことを彼らが知っているにもかかわらず、そのほうを選ぶというほどであり、また彼らの本性上可能な他方の快樂のいかなる量と引き換えにも、それらを放棄しようとしな、というほどであるならば、我々は、この選択された享受に、比較において量をほとんど問題にならないほどに圧倒する、質の優位を帰属させるのが正当である。(U 2.5)

唯一の適格な裁判官たちのこの判決から、私はもはや控訴がありえないのではないかと思う。二つの快樂のうちどちらが持つに値する最上のものか、または二つの生存様式のうちどちらが感情にとってもっとも喜ばしものかを、それらの道徳的屬性およびそれらの帰結から離れて決めるという問題について、両方を知っているので資格を持つ人々

の判断、あるいは彼らの判断が異なっているならそのうちの多数者の判断は、終局的なものとして認められなければならない。(U2.8)

このように、2つの快樂の質の優劣は、その両方の快樂を経験した大多数の人々によって判定されるべきであるとミルは述べている。そして彼らは知性の快樂、感情や想像力の快樂、道德感情の快樂などの精神的快樂を高級快樂と判定し、感覺的快樂を低級快樂と判定するとされる。彼らがこのような判定を下すのは「尊嚴の感覺 (sense of dignity)」があるからだと言っている。『功利主義論』でミルは尊嚴の感覺とは何かを説明していないが、『ベントム論』のなかでミルは、「名誉と人格的尊嚴との感覺—他の人々の意見から独立に働く向上と墮落のあの感情」<sup>5</sup>と述べている。尊嚴の感覺は、それを強く感じる人の幸福の本質的な部分となっているので、それと対立するものは、一時的な場合を除いて彼らの欲求の対象になることができないとされる。

快樂の質に関するミルのこのような考え方の骨子は、ハチスン (Francis Hutcheson) の『道德哲学の一体系』のなかですで見られる。快樂には高い種類と低い種類のものがあり、高い種類の快樂をもたらすのはとりわけ尊嚴の感情であるとハチスンは述べている。すなわち、

異なる種類の快樂を比較するとき、その価値は当該種類の快樂の、持続時間と尊嚴が結合したものである。我々は、いっそう低い種類の快樂が我々の望みうる限り長く続きもするとしても、いかなる強度のその低い種類の快樂も等しくなることができない、尊嚴、完全さあるいは至福の質の直接的な感覺をいくつかの種類 of 快樂において持つ。あらゆる外的感覺のいかなる強度あるいは持続も、知識や独創的な芸術による魂の改善の尊嚴や価値と等しい尊嚴や価値を当該の外的感覺に与えない。ましてその尊嚴や価値は、有徳な感情および行為の尊嚴や価値とも等しくない。……尊嚴のこの深い感情によって、いくつかの

種類の楽しみおよび実践は、それらの種類の最高度のものでなくても、低い種類のもっとも強く長く続く楽しみより比較を絶して卓越し至福のものである。<sup>6</sup>

このように、ハチスンによれば、尊厳の感情からくる高い種類の快樂の価値は、どれほど強くどれほど長く続く低い種類の快樂の価値より比較を絶して上位に置かれるとされる。

さらにハチスンは、快樂の種類を識別し快樂の種類に基づいてそれらの価値を的確に判定できるのは、両方の種類の快樂を経験した「高い序列の存在者」であると述べている。すなわち、

このように、異なる人は異なる嗜好を持つ。ある人が至上の楽しみとして賞賛するものを、別の人は軽蔑するかもしれない。我々はこれらの嗜好を吟味しなければならないだろうか。すべての人々、すべての序列の存在者は、各人がそれぞれもっとも好む楽しみを得る場合に、等しく幸福であろうか。もしそうであるなら、最も下等な獣や昆虫は、もっとも賢明な英雄、愛国者、友人が幸福でありうるのと同じくらい幸福でありうる。その低い序列に可能な限り獣を幸福にするものは、いっそう優れた構想力といっそう気高い種類の欲求を与えられた序列にとっては卑しむべきものにすぎないかもしれない。これらの高い序列の存在者は、低い序列の存在者には享受不可能な彼らの特有な楽しみにおいて、優れた尊厳と幸福にとっての重要さを直接的に意識する。……この世界における上位の序列は、おそらく低い序列のすべての感覚内容を体験するだろうし、それらについて判断することができるだろう。しかし、下位のものは、上位のものの楽しみを経験しない。<sup>7</sup>

尊厳の感情からくる高い種類の快樂と感覺的快樂のような低い種類の快樂とを区別してそれらの価値を比較できるのは、両方の種類の快樂を経

験した存在者であるというハチスンの考え方は、快樂の質あるいは種類に関するミルの考え方ときわめて近い。このように、快樂の質に関するミルの考え方はミルの独創ではない。むしろミルは、ベンタムの量的快樂主義にある問題点を回避するために、自らの快樂主義的功利主義の枠組みのなかにハチスンの考え方を取り入れたというべきであろう。

## (II) 高級快樂とは何か

前節で見たように、ミルはある快樂の価値が別の快樂の価値よりそれらの質に基づいて上位に置かれるという判断を下すための手続き、すなわち両方の快樂を経験した大多数の人がその判断を下すという手続きを提示していた。しかし、その判定手続きによってどのような答えが出されるのかについては、いくつかの具体例を示すだけで詳しく説明してはいない。そこで本稿では、両方の快樂を経験した大多数の人が上位に置く高級快樂とはどのようなものを明らかにすることを試みたい。

以下、ミルのいう高級快樂とは知性、情動、想像力、道德感情などの高次能力の行使がもたらす快樂であるという解釈（高次能力説）、およびミルのいう高級快樂とは、個性の発達あるいはその人らしさの開花がもたらす快樂であるという解釈（個性発達説）を順に見ていく。

### (II-1) 高次能力説

ブリנק (David Brink) は、ミルのいう高級快樂とは高次能力を行使する活動や追求であるという解釈を提示している。すなわち、

快樂が唯一の善であると快樂主義者がいうとき、彼らは「快樂」という言葉のある種の心理状態や感覚を指示するために用いる。しかし、高級快樂に関するいっそう客観的な解釈がここでは適切である。その

いっそう客観的な解釈によれば、「快樂」は快い心理状態を引き起こすかまたは引き起こすことができる行為、活動、追求のような非心理的な事柄を指示する。高級快樂とは、我々の高次能力（例えば知的能力）を行使する活動や追求である。<sup>8</sup>（下線は引用者）

このようにブリンクによれば、ミルのいう高級快樂とは快い心理状態ではなく、快い心理状態をもたらしうる高次能力を行使する活動や追求であるとされる。ミルのいう高次能力とは理性的能力とりわけ実践的熟慮の能力であり、熟慮の能力のもっとも重要な行使は、内省的選択と構造化された計画の実行つまり本人自身の一連の計画を見直し評価し選択し実行することにあるとブリンクは述べている<sup>9</sup>。

いま見た解釈を支持する根拠としてブリンクがあげているのは、第1に、ミルが「快樂」という言葉を活動や追求、とりわけ快い心理状態を引き起こす活動や追求を指示するためにしばしば用いること、第2に、ミルが高級快樂を持ち出すとき主として知的な活動や追求について述べていること、第3に、高級快樂と低級快樂の両方を経験した大多数の人が選好するとミルが考えるもののなかに活動や追求が含まれることである。

第1の点を示すミルの叙述としてブリンクがあげているのは『功利主義論』4.5, 2.7および2.8である。まず、『功利主義論』4.5でミルは以下のように述べている。

〔徳がそれ自体のために欲されるという〕この見解は、いささかも幸福原理から逸脱していない。幸福の諸要素は非常にさまざまであり、そしてそれらの各々が、それ自体として望ましいものであって、たんに総量を増大させると考えられる場合だけそうなのではない。功利原理は、例えば音楽のような、何であれ一定の快樂、あるいは例えば健康というような、何であれ一定の苦痛の免除が、幸福と名づけられる集会的なあるものに対する手段と見られるべきであり、そしてそのた

めに欲求されるべきであるということの意味しない。それらは、それ自体として欲求されており、また望ましいのである。それらは、手段であるうえに、目的の一部でもある。(U 4.5)

ここでミルは、幸福が徳、健康、音楽のような、心理状態でない構成要素からなると述べているとブリンクは解釈している。

また、『功利主義論』2.7 でミルは、「人々はしばしば、性格の弱さから、価値において劣ることを知りながら、近いほうの善を選択する。そしてこのことは、2つの肉体的快樂の選択の場合に、肉体と精神の快樂の間の選択の場合より、少ないわけではない。彼らは、健康のほうが大きな善であることに完全に気づきながら、健康を損なっても感覺的耽溺を追求するのである」と述べている。ブリンクによれば、ここでミルは健康と感覺的耽溺を快樂と見なしているとされる。

さらに、『功利主義論』2.8 でミルは、「2つの快樂のうちどちらが持つに値する最上のものか、または2つの生き方のうちどちらが感情にとってもっとも喜ばしいものかを、その道徳的屬性およびその帰結から離れて決めるといふ問題について、両方を知っているので資格を持つ人々の判断、あるいは彼らの判断が異なっているならそのうちの多数者の判断は、終局的なものとして認められなければならない」と述べている。ここでミルは快樂と生き方を同じものと見なしているとブリンクは述べている。

ミルが高級快樂を持ち出すとき知的な活動や追求について主として述べているという第2の点を裏付けるためにブリンクが引用するのは、「…功利主義的な著述家たちが、一般に、肉体的快樂に対して精神的快樂を、主として後者の恒久性、安全性、コストがかからないことなどのために——つまり、それらの内在的性質よりも付随的利益のために——上位に置いていることを認めなければならない」(U 2.4) というミルの叙述である。ブリンクによれば、付随的利益の点でいっそう価値があるつまりいっそう高い外在的価値がある精神的快樂として功利主義的な著述家たちが認めて

いたのは、心理状態ではなく知的な活動や追求であったとされる。そして、「このまさに同じものが外在的のみならず内在的にもいっそう価値があるとミルは主張するので、彼のいう高級快樂は心理状態よりもむしろ知的活動や知的追求であるように思われるだろう」<sup>10</sup>とブリンクは述べている。つまり、ブリンクの考え方によれば、功利主義的な著述家たちがいっそう大きな外在的価値を持つと見なした知的な活動や追求が、いっそう大きな内在的価値を持つ快樂即ち高級快樂であるとミルが述べているとされる。

最後に、高級快樂と低級快樂の両方を経験した大多数の人が選好するとミルが考えるもののなかに活動や追求があるという第3の点を裏付けるためにブリンクが引用するミルの叙述は以下のものである。

さて、次のことは疑問の余地のない事実である。すなわち、両方を同じように熟知し、同じように評価し享受しうる人々は、彼らの高次能力を行使する生き方のほうに、きわめてはっきりした優位を与えるということである（U2.6：下線はブリンクによる）

ここでミルは、高級快樂を、我々の高次能力を行使する活動や追求と同じものと見なしているとブリンクは述べている。

いま見たブリンクの解釈は、ミルのいう高級快樂が心理状態ではなく活動や追求であるという主張、およびその高級快樂が高次能力の行使からくるという主張を含む。ミルのいう高級快樂が快い心理状態ではなく、高級な能力を行使する活動や追求であるという第1の主張には異論の余地がある。たとえばクリスピー（Roger Crisp）によれば、ミルのいう快樂とは、ある人が楽しんで行う何らかの活動であるよりもむしろ快い経験であるとされる。クリスピーがそう考える理由は、ミルが快樂を苦痛と対比したり、苦痛がないことと並べたりしていること、および英語における「苦痛（pains）」という言葉が苦しい経験を意味し苦痛をもたらす活動を意味することができないことである。苦痛という言葉が苦しい経験を意味するの

であれば、それとのペアで用いられる快樂という言葉も快い経験を意味すると考えられる<sup>11</sup>。したがってクリスピーによれば、ミルのいう高級快樂とは一種の快い経験であり、高級快樂を活動や追求とみなすブリンクの解釈は誤っているとされる。クリスピーのこの考え方には説得力があるので、ミルのいう高級快樂を活動や追求とみなすブリンクの解釈には、控えめに言っても異論の余地がある。

しかし、ミルのいう高級快樂が高次能力の行使からくるというブリンクによる第2の主張は、ミルの叙述によって支持されている。この主張を裏付けるミルの叙述として、本節で引用した『功利主義論』2.6 のほかに以下の箇所をあげることができる。すなわち、

これらの〔2つの快樂の両方を経験した人々の〕感情と判断が、高次能力からもたらされる快樂は、強度の問題は別にして、高次能力からきりはなされた動物本性が感じる快樂よりも、種類として望ましいと宣告した場合、それらはこの問題について同様に尊重される資格がある。(U2.8)

ミルによれば、高級快樂とは2つの快樂の両方を経験した人々が種類としていっそう望ましいと宣告された快樂であるとされるので、いま引用した箇所でもミルは、高級快樂を高次能力の行使がもたらす快樂と見なしている。

そこで、ミルのいう高級快樂が活動であるというブリンクによる第1の主張を受け入れるかどうかは未決定のままにしておき、高級快樂とは高次能力の行使がもたらす快樂であるというブリンクによる第2の主張のみを取り上げて、この主張を高級快樂に関する「高次能力説」と呼ぶことにする。

## (II-2) 個性発達説

グレイ (John Gray) は、『功利主義論』における高級快樂と、『自由論』における個性との間に重要な関連があると述べている。すなわち、

さらに私は、『功利主義論』における高級快樂の理論と、『自由論』第3章における個性についての説明との間に、重要であるが概して無視されてきたある連関があると論じたい。両者を連結するのは、自律的な選択という概念であり、これはいかなる高級快樂にも、また個性を表すいかなる生活や活動にも必要な構成要素である。つまり、高級快樂についての理論は、しばしば紹介されてきたような、ばかげた考えでないばかりか、自由論を構成する要素だと私は主張したい。<sup>12</sup>

そして、結論としてグレイは次のようにいう。

人間本性の多様性についてのミルの確信と、高級快樂についての説明は対立しているだろうか。私は対立しているとは思わない。というのは、ミルの高級快樂の規準は、その快樂が自律的な思考と選択の過程を経て選ばれ、個人の本性の独特な要求を表現していることにあるからである。<sup>13</sup> (下線は引用者)

このように、グレイによれば、ミルのいう高級快樂の規準は、当該の快樂が個人の自律的選択と個性を表す程度であるとされる。私は、グレイのこの解釈を若干敷衍して、高級快樂とは、個性の自由な発達あるいはその人らしさの十分な開花繁榮 (flourishing) がもたらす快樂であると考えたい。

ミルのテキストは、この解釈を支持するだろうか。『功利主義論』において、ミルは、高級な能力を持つ人が愚か者や下劣な人になることを望む

ことは決してないと述べている。すなわち、

高級な能力を持つ存在者は、下等な型の存在者より、幸福になるには多くのものを必要とするし、おそらく鋭い苦痛をうけやすく、たしかに多くの点で苦痛に接することがありうるのである。だが、これらの傾向があるにもかかわらず、彼が自分より低い生存の程度と感ずるものに落ちようと、実際に望むことは決してありえない。(U 2.6)

高級な能力を持つ人が愚か者になることを望まないのは、自己尊重、自由と独立への愛、権力への愛、精神的高揚への愛などのためであるともいえるが、もっとも適切な言い方をすれば、「尊厳の感覚」のためであるとミルはいう。すなわち、「このためらいについて、好きなように説明することができる……しかしそのもっとも適切な名称は尊厳の感覚であって、それはすべての人間が何らかの形で所有し、彼らの能力の高級さに決して正確にはないがある程度比例して、所有しているものなのである。そして、尊厳の感覚の強い人々においては、尊厳の感覚が彼らの幸福の基本部分になっていて、そのために、それと矛盾するものは、一時的な場合を除いて、彼らにとって欲望の対象とはなりえないほどなのである」(U 2.6)。このようにミルによれば、知性、情動、道徳感情などの高次能力を持つ人が動物的欲求しか持たない人になりたいとは決して望まないのは、高次能力を備えていることが当人の「尊厳の感覚」を満たすからである。そして、尊厳の感覚は当人の幸福の基本部分になっているとされる。

一方、ミルは『自由論』において、「個性の自由な発達が幸福の主要な要素の1つである」と述べている。すなわち、

要するに、何よりも他の人びとに関係するのでない事柄においては、個性が自己を主張することが望ましい。その人自身の性格ではなくて、他の人びとの伝統または主観が、行為の規則であるところでは、人間

の幸福の主要な構成要素のひとつ、そして個人的進歩および社会的進歩のまさにもっとも重要な構成要素が欠如しているのである。(L 3.1)

このように個性の自由な発達も、尊厳の感覚と同じように、当人の幸福の基本部分になっている。

それでは、「個性の自由な発達」、「尊厳の感覚」、および「高次能力」の間の関係はどのようなものだろうか。個性の自由な発達は尊厳の感覚をもたらすだろう。また、尊厳の感覚を持つためには、当人の個性が少なくともある程度は発達していなければならないだろう。このように、「個性の自由な発達」と「尊厳の感覚」という幸福の2つの主要な構成要素は、分かちがたく結びついている。

そうであるならば、高次能力の行使は既に見たように尊厳の感覚をもたらす手段であったので、それはまた個性の自由な発達をもたらすための手段にもなるだろう。言い換えれば、高次能力の行使は、個性の自由な発達および尊厳の感覚がもたらす快樂の経験のための手段である。

ミルの考え方をこのように解釈すれば、高次能力の行使がもたらす快樂が高級快樂であるのは、突き詰めて言えば、その快樂が「個性の自由な発達」および「尊厳の感覚」による快樂をもたらすからである。つまり、高級快樂の「高級」たる所以は、その快樂が高次能力の行使からくことよりはむしろ、個性の自由な発達および尊厳の感覚からくことにある。

### (Ⅲ) 個性発達説の擁護

前節で見たように、高級快樂に関する高次能力説と個性発達説は、どちらもミルのテキストと整合する解釈であった。しかし、個性発達説のほうが高次能力説よりいっそう魅力的な解釈である。というのは、第1に、高次能力説が、個性の発達という目的のための手段である高次能力によつ

て高級快楽を定義しているのに対して、個性発達説は個性の発達という目的によって高級快楽を定義しているので、個性発達説のほうが高級快楽の本質にいつそう迫る解釈であるからであり、第2に、高次能力説が納得の行かない結果に行き着くのにに対して個性発達説はそのような結果に行き着かないからである。

第1の点に関してまず、ミルは、個性が人間の目的であるというフォン・フンボルト (Wilhelm Von Humboldt) の見解を賞賛している。すなわち、

「人間の目的、つまり永遠または不変な理性の命令の指令したものであって、あいまいでうつろいやすい欲望の示唆したのではない目的は、人間の力 (powers) を最高度にもっとも調和的に発達させて、ひとつの完全で矛盾のない全体とすることである」。したがって、「あらゆる人間がたえずその努力をむけるべき」目的、「またとくに同胞に影響を与えようと意図する人びとがつねに注目していなければならない」目的は、「力と発達の個性である」。(L 3.2)

ここでミルは、力と発達の個性こそが理性が指令する人間の目的であるというフンボルトの考え方を受け入れている。

そして、ミルは、個性が選択によってもたらされるという見解を取っている。すなわち、「要するに、何よりも他の人びとに関係するのでない事柄においては、個性が自己を主張することが望ましい。その人自身の性格ではなくて、他の人びとの伝統または主観が、行為の規則であるところでは、人間の幸福の主要な構成要素のひとつ、そして個人的進歩および社会的進歩のまさにもっとも重要な構成要素が欠如しているのである」(L 3.1)。ここで、「その人自身の性格ではなくて、他の人びとの伝統または主観が、行為の規則であるところでは」、つまり当人自身の判断と傾向に基づいて選択しないなら、人間の幸福の主要な構成要素である個性の発達

はないとミルは述べている。

さらに、人間の高次能力は、選択を下すことによって行使されるとミルはいう。すなわち、

知覚、判断、識別感情、精神的活動という人間の能力、および道徳的選好という人間的能力でさえ、選択をするなかでのみ訓練される。  
(L 3.3)

当人の人生計画を、世間あるいは当人が属する世間の一部に当人に代わって選んでもらう人は、猿のような模倣能力のほかには、なんの能力も必要としない。自分の計画を自分でえらぶ人は、彼のすべての能力を用いる。(L 3.4)

このようにミルにおいて、判断、識別する感情、心的活動、道徳的選好といった高次能力の主要な目的は選択を下すことである。

要するに、高次能力の目的は選択を下すことであり、選択を下すことによって個性の発達という人間の目的が達成できるというのがミルの考え方であった。したがって、個性の発達という目的によって高級快樂を定義する個性発達説は、高次能力という手段によって高級快樂を定義する高次能力説より、高級快樂の本質に迫るという点で、いっそう望ましい解釈である。

第2の点に関して、知性、情動、想像力、道徳感情などの行使がもたらす快樂を、肉体的、感覺的快樂より比較を絶して上位に置く高次能力説をとれば、飲食の快樂、性の快樂など肉体的快樂を墮落的なものとして人生から排除するという、ミルにある納得の行かない傾向<sup>14</sup>を強調することになる。この傾向が受け入れがたいのは、大多数の場合、肉体的快樂は当人にとって価値ある人生を送るために不可欠な基盤になっているので、一切の肉体的快樂を人生から排除するとその人生が貧しいものになってしまう

うからである。肉体的快樂がたいのばあい当人にとって価値ある人生を送るために不可欠な基盤になっていることは、事故のせいで首から下のすべての運動能力と感覚を失い、自力で飲食できず鼻から胃にチューブを入れて栄養を摂取している寝たきりになった人が喪失した良きものを高次能力がもたらす快樂によって代償することがどれほど困難であるかを想像してみれば、容易に理解できるだろう。

一方、個性発達説をとれば、肉体的快樂を正当に評価することができる。というのは、個性の自由な発達、その人らしさの十分な開花という観点から見れば、一切の肉体的快樂を喪失した人は、当人の個性を十分に発達させることがきわめて困難になる可能性が高いからである。

## 結 び

ミルのいう高級快樂とは高次能力の行使がもたらす快樂であるという解釈（高次能力説）と高級快樂とは個性の発達あるいはその人らしさの開花がもたらす快樂であるという解釈（個性発達説）は、どちらもミルのテキストと整合するが、個性発達説のほうがいっそう魅力的な解釈であることを見た。というのは、第1に、個性発達説のほうが高級快樂の本質に迫るものであり、第2に、高次能力説が納得の行かない結果に行き着くのに対して個性発達説はそのような結果に行き着かないからである。

（みずの・としなり 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程）

---

\* J.S.ミルの著作のうち『自由論』および『功利主義論』は以下の略号によって指示し、章、段落で箇所を示す。

L: *On Liberty*, 1895.

U: *Utilitarianism*, 1863.

邦訳は、『世界の大思想 28 ミル』（水田洋・訳者代表、河出書房新社、1972

---

年)を適宜参照した。

- 1 J.S.ミル研究会(2008年6月14日)にて口頭発表。
- 2 Bentham, J., *An Introduction to the Principles of Morals and Legislation*, (Burns, J., Hart, H. L. A. eds.), Oxford, Clarendon Press, 1996, ch.4 (邦訳『道徳および立法の諸原理序説』山下重一訳、関嘉彦編『世界の名著 49 ベンサム、J.S.ミル』、中央公論社、1979年)。
- 3 Mill, J. S., Bentham, *The Collected Works of John Stuart Mill*, (General ed. Robson, J.), vol.10, London, Routledge, 1969, p.113 (邦訳『ベンサムとコールリッジ』松本啓訳、みすず書房、1990年、123頁)。
- 4 Schneewind, J. B., Introduction of Mill's Ethical Writing, Schneewind J. B. ed., *Mill's Ethical Writings*, London, Collier-Macmillan, 1965, pp.17-20. 泉谷周三郎「ジョン・スチュアート・ミルによる快樂の量と質との区別について」、『哲学倫理学研究』100、1975年、98頁。
- 5 Mill, J. S., *op.cit.*, pp.95-6 (邦訳 88-9頁)。
- 6 Hutcheson, F., *A System of Moral Philosophy, Collected Works of Francis Hutcheson*, vol.5, Hildesheim, Georg Olms, 1969, p.117.
- 7 *Ibid.*, pp.119-20.
- 8 Brink, D. O., Mill's deliberative utilitarianism, *Philosophy and Public Affairs* 21, 1992, pp.72-3.
- 9 *Ibid.*, p.79.
- 10 *Ibid.*
- 11 Crisp, R., *Mill on Utilitarianism*, London, Routledge, 1997, p.27.
- 12 Gray, J., Mill's conception of happiness and the theory of individuality, Gray, J., Smith, G. W. eds., *J. S. Mill ON LIBERTY in focus*, London, Routledge, 1991, p.190 (邦訳『ミル『自由論』再読』泉谷周三郎、大久保正健訳、103頁)。
- 13 *Ibid.*, p.209 (邦訳 125頁)。
- 14 R.ノーマンはミルにあるこの傾向を指摘し、修正を試みている。Norman, R., *Moral Philosophers: An Introduction to Ethics, 2nd edition*, Oxford, Oxford U. P., 1998, p.96 (邦訳『道徳の哲学者たち』、塚崎智、石崎嘉彦、樫則章監訳、ナカニシヤ出版、2001年、165頁)。